



さーくる

ねっと



作：redstone

サマーシンドローム

作：大佐

夏の情景。とにかく暑い日差しが目の中に飛び込んでいたことだけは、確かな事として思い出せる。眩しかった。時を経て思い返すと、なおの事眩しかった。あまりの眩しさにそれ以外の情景は滲んでしまい、はっきりと思い出すことが出来ない。それほど年を重ねたつもりもないのに、こんな調子だから、そのうち過去は理想とすり替えられていくに違いない。たぶん、きっと、森はもっと多かった事になるし、毎日毎日虫取りしていたって事になる。森はそれほど大きくなかったし、虫取り以外の遊びだってしていた。でも、それは昔の子供っぽくないから嘘という事にしてしまうのだ。そんなに仲が良くなかった友達も、親友だった事になるのだろう。

夏の情景。目をつぶれば、まだ思い出せる。眩しい日差し、そして子供たち。顔は日差しが眩しすぎて見えない。その中に俺はいた。そうだ。あの頃はセミがいた。やかましく鳴いて、季節を俺たちに伝えていた。そう、カナカナカナ・・・と。何故だかそのセミの声は耳の底からやってきているかのように聞こえて、思い出にある川のせせらぎも花火の音も子供の騒ぎ声も、その声に流されてしまう。カナカナカナ・・・、カナカナカナ……。どこか悲しげに聞こえる声が俺の耳にへばりついていて。

「ああ、うう、何だ朝か」

けたたましく朝を告げる目覚まし時計を止め、今が何時かを確認する。浮かんだほこりが、窓から入った強い日差しを反射してきらめいている。床にはチラシやらレジ袋が散乱し、住人がだらしない独身男であることを証言していた。

妙な夢も煙のように頭から抜け出ていき、体にまとわりつく暑さへの不快感に置き換えられていく。コップ満杯の水を喝いた喉に流し込む。そうして人心地つくのと、どんな夢だったか言葉に出来なくなっていた。

顔を洗い、飯を食う。今週はコーンフレークだけだ。皿に入れるだけだから面倒が少ない。健康番組に影響されてバナナだけの時期もあったが、今はフレーク系だ。子供の頃はコーンフレークを毎日朝食にしてみたいとか考えていたから、かつての夢を叶えていると言えるのかもしれない。

鳥の鳴き声よりも先にセミの鳴き声が聞こえてくる。太陽がもう少し高くなれば、やがて鳴き声から大合唱に変わる事だろう。この殺人的なまでの暑さをものともしない。セミという奴は儚いように見えて、結構強いのかもしれない。

セミたちがやかましく鳴く。太陽光線はもはや殺人光線の域に達していた。いや、もしかしたら太陽が暑いのではなく、俺が暑いのではないだろうか。体の皮膚が熱を発しているよ

うな錯覚を覚えていた。暑い暑い暑い。汗が噴き出していく。拭っても拭っても汗が出ていく。

拭いながら、今日やらなければならない事を頭の中で組み上げていく。一通り考え、もう少し詰めようかと思ったところで、周囲に目を向けた。俺は駅に向かっていた。他にも駅に向かう人々がいた。皆、一様に暑そうに汗をかきながら歩いていた。太陽は人間を等しく干物にしてしまうつものようだ。会社に着く頃には、俺は乾いたスポンジのようになってしまっているのではないだろうか。

「田中さん、知ってました？ もうそろそろ夏も終わりらしいですよ」

「いや、この暑さで終わりとか言われてもなあ」

「これからあ寒くなるんですよ、ズドーンと寒くなるんです。油断して衣替えサボったら泣きを見ますよ」

同僚の鈴木と軽い世間話をする。これから寒くなるとは言いが、どうにも信じられない。アイスクリームどころか人間まで溶かしてしまいそうなこの太陽が、あと数週間もしたら大人しくなるという。永遠に鳴き続けるセミも黙ってしまう。経験も様々な記録も教科書もそうだと予言しているが、本当かどうか怪しんでしまう。今日の世界と明日の世界は全く異なっていると言われても、想像がつかないように。本当に夏は過ぎ去ってしまうのだろうか。

「にしても、ちょーっと暑くないですか？ クーラーの温度、高くないですか」

「確かにちょっと暑いけど、温度変えるのはなあ」

「・・・鈴木さん、これ以上上がりませんよ。さっき私が最低まで下げたので」

「早乙女さんそれマジ？ 嘘だろポンコツクーラーもう限界かよ」

暑さは均等に配られるが、冷気はそうではないらしい。人によっては薄い毛布を膝にかけているが、ここには冷気があまりやって来ていない。近くに窓があるからかもしれない。ここは外と比べればパラダイスだが、人間とは欲深い生き物でもっと涼しく快適に過ごしたいものだ。同僚の一人である早乙女さんは、卓上クーラーを設置し、手持ち扇風機を常備していた。

窓の外を見ると、太陽はキラキラと輝き、セミはやかましく鳴いていた。

昼頃、外を出歩いていると、子供たちが集まって遊んでいるのが見えた。ゲームで遊んだりもするのだろうが、手に収まるゲームくらいでは子供の熱量を消費しきれないらしい。この暑さでも元気に遊んでいた。今でもあんなに走り回れるだろうか。自分の太ももを撫でる。見ると足元を小さな光の魚が泳いでいた。上を向いてみると、木の葉の間から光が漏れていた。風で揺れ、眩しくなったり暗くなったりを繰り返す。どこか懐かしい気持ちになり、何かを思い出しそうになる。そうだ、こんな光を以前にも見た気がする。きゃあきゃあ響く子供たちの声、セミの鳴き声、そして、顔が見えない子供。あれは誰だったか……。頭の中にある記憶の戸棚を開こうとぼんやりと手を伸ばすと、急に後ろから声をかけられた。

「あれ、田中さんじゃないですか。もう飯は食いましたか」

「ん、ああ。いや、まだだけど」

「それじゃあ今から行きませんか。近くに新しい店が出来たみたいなんですよ、まあ唐揚げの店なんですけど」

言葉を発する度、一步一步足を動かす度に、記憶のささくれのような何かは、夢と同じように手からすると抜けて行ってしまった。店の前に来る頃には何を忘れたのかすらさえ、忘れてしまった。山盛りの唐揚げにいつまで喜べるだろう。

コンビニでビールと枝豆を買い、冷蔵庫に入れてあった焼き鳥を電子レンジに放り込んだ。仰向けになり、手足を投げ出す。テーブルの脚に足をぶつけた。手探りでリモコンを探し、テレビのスイッチを入れる。大げさな効果音と笑い声が部屋をにぎやかにする。少し意識を手放しそうになりながら、天井を眺める。

もうそろそろ夏が終わる。さっさと過ぎ去ってくれと願う事もあった。だが、この永遠に続くかと思われる夏も、限りある季節なのだ。やはりセミは死ぬものであるし、スイカも店の棚から姿を消す。海も入る物から遠目に眺める物になる。我が物顔で遊びまわる子供も新しい季節に備えている。そう思えば、この殺人的な季節も名残惜しい物のように感じてくる。出会いと別れの季節があるのだから、季節の出会いと別れもあってしかるべきなのだ。けれど、この寂しさは何なのだろう。自分でも自覚が無いほど、夏が好きで、もっと夏を、夏らしさを楽しみたかったのだろうか。いや、これは、もっと根本的なもので、夏らしい物は他にもあるはずなのに、つい、外で遊ぶ子供たちやセミなどを目で追ってしまう。子供時代に戻りたいほど、自分は疲れていたのだろうか。

温めた焼き鳥のプラスチックの容器を机に置き、肘をつく。今更子供に戻れる訳は無いし、この焼き鳥も枝豆も、何よりビールを飲めなくなってしまう。そうだ。大人にしかできない事はたくさんある。何も子供時代を懐かしむ必要なんてどこにもない、懐かしむほど年を取ったつもりもない。勢いよく缶を開け、喉に流し込む。この黄金の清流と共にこの気持ちも夏も流してしまおう。

「さらば夏、こんにちは秋！新しい季節に乾杯！」

缶ビールを掲げ、酔いに任せて叫ぶ。明日もきっと暑いだろう。夏が去るなんて冗談のようにしか思えないに違いない。暑さという夏の濃い残り香が消えた時、ようやく、夏が去ってしまったことに気付くのだ。だから今、去り行く夏の背中に別れを告げる。さあ、もう一本開けよう。

遠くにセミの鳴き声が聞こえる。じっとりとした汗が服を背中にくっつける。木造の家の中。ほこりっぽい臭いがする。俺はなぜここに居るのだろう。周囲は薄暗く、よく見えない。いや、誰かいる。ギィギィ、床が軋む音がして……。セミの鳴き声はだんだんと大きくなっていく。息が苦しい、心臓の音がやたら大きく聞こえるような気がして、耳の奥がごうご

う鳴っているような気がする。セミの鳴き声がやかましい、聴覚が視覚も触覚も塗りつぶしてしまう。あの時のセミの鳴き声はもう聞きたくない。俺を責め立てるように鳴いて、後ろから首を絞めるように苦しめてくる。・・・あの時、あの時？

目が覚め、ひどく汗をかいていたことに気付く。喉が渴いた。とにかく、水を喉に流し込もう。嫌な気分を冷たい水がそそぎ落してくれる。なんて寝苦しい夜だったろう。水をもう一杯飲んで、いつも通りのルーティーンに俺は戻っていった。

夏との別れを叫んでから、だいたい一、二ヶ月か経った。しかし、夏は一向に去ろうとはしなかった。夏の残り香たる暑さは量を間違えた香水のように残り続けていた。ここまですると消臭剤で臭いを消したくもなる。いよいよ地球温暖化の主犯格と目される二酸化炭素は、地球の公転軌道さえも変えてしまったのか。この居座り続ける夏という異常気象は全地球人類の問題で、俺個人が担うべき負担は小さい。何故なら、問題を全人類で頭割りするからだ。分配の仕方によってはもっと軽くなる。しかし、これが個人の問題となると凄まじい大問題となる。というのも、どうやらこの夏は、俺のところにだけに居座っているようだからだ。そのことに気が付いたのは、ほんの数日前のことだった。

「あつい・・・！」

会社への道すがら、思わずつぶやいてしまった。つぶやいて、少し辺りを見回す。誰もこちらを見ていない。こういう人が行きかう中での独り言は少し恥ずかしい。わざわざ気に留めるような人間はいないとわかっていてもだ。努めて口をつぐんでいようとするが、暑さで顎がとろけて本音が心の奥底からこぼれてしまいそうになる。暑い。これは別に今に始まった事ではないが、暑い。昨日まで気にしていなかったが、都会の人間というのは超人の類なのだろうか、皆、涼しげな顔をしてスイスイと歩いていく。一人汗をかいているのが馬鹿らしくなってくる。暑い暑い。努めて口にしないようにしないと、一言目にも二言目にも、暑いと言ってしまうそうになる。夏になってから何一つ変わらない日々とはいえ、同じことばかり言っては精神衛生上よろしくないというものだ。あつ、いや、頑張ろう頑張ろう。いくら長い夏とはいえ、冬が来ないわけがない。急に冷え込んで風邪をひいてしまうだろうが、とにかく暑いのは終わる。頑張ろう頑張ろう。心の内で繰り返すと、いつの間にか目的地についていた。

「暑さも残ったりしてますけど、最近衣替えしたんですよ」

「へえ、でもまだでもよさそうじゃないか？」

「いやいや、僕も不精ですけど、さすがにですよ」

「そうかなあ、俺はまだ大丈夫だと思うなあ」

「ええー、我慢強いんですねえ」

「そうでもないけれど、しかし、暑いね」

服の胸元を掴み、ぱたぱたと内側の暑くなった空気を入れ替える。夏の残りというより、夏の継続ではないだろうか。窓の外をチラリと見る。太陽は輝き、セミは鳴いていた。

「そーですかねえ。あ、ほんとに暑そうですね」

「・・・田中さん。よかったらこれどうぞ」

会話を聞いていた早乙女さんがデスクから手持ち扇風機を取り出して渡してくれた。手であおぐよりも何倍も良いのだけれど・・・。いいのだろうか？

「手持ち扇風機、あまり使わなかったし、次も使わないと思うので。どうぞ」

「いやぁ助かります。ああ、本当、いつ寒くなるんだか。セミも元気だし」

「田中さーん、時々暑いですけど、時々は寒くなってるじゃないですかぁ。それにセミなんて皆死んでますよ〜」

「ええ？ 今も外でセミが元気にないてるけど」

鈴木は驚くと目をつぶり耳に手をあて、耳をすまし始めた。二呼吸ほど黙っていたが、困った顔をして俺を見た。

「セミの声なんて聞こえないですよ。マジに聞こえてるなら、言い方悪いですけど病院行った方がいいです。マジで」

もしかして、このセミの声は自分にしか聞こえないのだろうか。早乙女さんに助けを求めるように目を向けるが、首を振られてしまった。あんなにうるさく鳴いているというのに。耳を澄ませば、子供のはしゃぐ声も聞こえてくるというのに。・・・今の時期の今の時間に？

こうして、どうやら異常気象の結果として、夏が大延長されているわけではなく、純然たる異常に巻き込まれていることがわかった。そして今、病院にいる。といっても総合病院ではなく、何やら立派な先生のいる個人病院の類らしい。精密検査をした結果、それらしい病名がわかったらしいのだが、確かな事が言えないらしく、その筋の先生に診てもらう事になった。そういう事で、この病院にやってきたのだった。待合室で順番を待ちながら、そっと周囲の様子をうかがう。自分と同年代もいれば、多感そうな十代の子もいた。病院の待合室と言うと、爺さん婆さんの社交場のようにになっているものと勝手に思っていたので意外だった。それほど時間はかからないらしく、次々に名前が呼ばれ、診察室に入っては出ていく。棚に置いてある雑誌をパラパラと眺めている間に自分の番が来た。

雰囲気の良い看護師さんに案内され、椅子に座る。対面には件の先生が座っていた。眉間の深いしわが医者としての苦労を物語っているようだった。しかし、その細い目の奥からの眼差しには、長年の経験に裏打ちされた自信と優しさがあつた。端的に言ってしまえば、これは名医っぽい。それらしい服装をさせれば仙人のようにも見えるだろう。

前の病院での検査結果をじっくり確認し、いくつかの問答をする。先生は問答をしながら片手でメモをとっていた。問答とメモの上を走るペン先が同時に止まった。

「それで先生。私はどんな病気なんでしょうか」

「うん。病気の一つではあるね。でもそんなに深刻じゃありません」

先生は安心させようとしているのか、いないのか、今一分かりにくい励ましをする。うんうんと頷きながら言葉が続ける。

「随分と変わった病気ですが、命に関わるような重病でも不治の病でもありません。ただ、まあ、変わった病気です」

先生は眉を八の字にし、もともと深い眉間のしわをさらに深くしながら、変わった変わったと言う。一体どんな奇病だというのだろう。過労の類かも思っていたのに。

「マ、一種の精神病・・・、ヤ、精神病というのもちょっと違いますね。ともかく、あなたの病名は、夏症候群です。サマーシンドローム」

「サマー・・・シンドロー・・・ム？　ですか」

サマーシンドローム。夏症候群。さっぱりわからない。何がサマーなのか、何が夏というのか。テレビでやっている医療バラエティーを見ていて、病名というやつは分かりにくい物と思っていたが、ここまできると意地悪のように思える。そもそも客観的に言えば今は秋だ。

「サマーシンドロームというのはですね、夏から出られなくなる病気なのです」

「と、言いますと・・・？」

「時期外れのセミの鳴き声が聞こえる。蚊の羽音が聞こえる。日差しが強く感じる。アスファルトの照り返し、カラリと晴れた青空、遠くを見ると景色が歪む蜃気楼・・・。等々。夏らしい情景を感じる病気なのです」

「つまり、幻聴や幻覚の類ですか」

何ということだろう。大変な病気じゃないか。やはり過労だったんだ、普段から自分を労わらなかった結果だろうか。

「ああ、ああ。勘違いなさらないでください。まあ、確かに幻と言われたら幻なのですが、違うのですよ。患者さんにとっては本当の事なのです」

「なんだか要領を得ませんね」

「変わった病気ですから。この病気の変ったところは、患者さんにとって本当にそうになっているところなのです。例えば大雪が降ったとしましょう。サマーシンドロームの患者さんはどうなと思います？」

「そりゃあ、夏だと感じているわけですから、薄着でほっつき歩いて凍えてしまうのでは」

「おっしゃる通り。薄着で出ていくのですけどね、霜焼けにもならず、風邪もひかないのです。何だったら、熱中症で病院に運ばれさえしてしまうのですよ」

「いやいや、先生。冗談でしょう。そんな真夏みたいな・・・」

「いいえ。冗談ではないのです。サマーシンドロームとは、そういう病気なのです」

数分前にこいつを名医だと思った奴は誰だろう。ぶん殴ってしまいたい。ここは本当に病院なのだろうか。何が悲しくてオカルト染みた話を聞かなきゃならないのだろう。病院のオカルトは怪談話だけで十分じゃないだろうか。そのように思いつつも、一方でサマーシンドロームを否定しきれない自分がいた。

「サマーシンドロームはですね、あなたぐらいの年の大人になるのです。まあ、いわゆる中

年の危機の一種といいいましょか。アイデンティティの確立に悩む若人にあれだけ不思議な事が起こるのですから、サマーシンドロームも不思議ですが、不思議ではないのです」

「はあ、まあ、そうですか。それで先生？ 薬とかは」

「変わった病気ですから。治療薬の方はありません」

「はっ？」

「サマーシンドロームは心の病です。対症療法は出来ますが、根治が出来ません。心は薬では治せないのです。さらに言えば、これは風邪の熱と同じなのです。心が心のある部分を治そうとして・・・夏に引き留めているというわけです」

「先生。結局のところ、待つしかないということですか」

「いえ、そうではありません。原因を探して、それと向き合い、折り合いをつけることが出来れば、快方へ向かいます」

「原因と言われても、心当たりなんてありません」

「この病気はですね、後悔があるとなりやすいのです。大抵、皆さん、夏に後悔をしていらっしゃるみたいで、夏が多いのです。もちろん、春症候群や冬症候群もあります。休みと若さの組み合わせは後悔が起きやすいのでしょうね。夏です。田中さん。思い出せなくても、無意識はもう思い出していて、夏という痛みを出している訳です」

「後悔なんて・・・わかりました。これからどうすればいいですか」

「故郷に帰って、体験や印象をまとめてください。夢もです。それから治療の方針を立てましょう。不安がらなくてもいいです。まとめている間に治ってしまうこともあるのです。」

病院での診断はすごぶる怪しかった。しかし、紹介してくれた病院は確かだったし、他にあてがあるわけでもない。大人しく先生の方針に従うことにした。すなわち、帰郷だ。幸い、休みを取る事は簡単だった。まあ、幻覚幻聴に一步間違えれば熱中症とくればまともに仕事にならない。

天気予報は雨。気温は 20℃。秋の寒さがやってくるという話だった。荷物をまとめ、俺は駅に向かった。空は快晴で、ギラギラとした太陽が嘲笑っていた。

駅のホームには人々。帰省の時期ではないとはいえ、多くの人が利用していた。こうも多いとどこから湧いて出てきたのだろうなどと感じてしまう。性根が田舎者なのだろうか。なんとなく人々を観察してしまうが、やはり、寒さに備え始めた服装をしていた。体感では半袖で良いとすら思うのだが、そんな格好では凍えてしまうのだろう。自分の置かれた状況の異常さを改めて感じずにはいられなかった。そんな中、ある老人が目にとまった。俺と同じように薄着をして、誰かを待っているようだった。異国で仲間を見つけたかのような気持ちになって、つい話しかけてしまった。

「あのう、もしかして、サマーシンドロームの方ですか」

「うん？ ええ、そうですよ・・・どうやら、あなたもですか」

「はい。この時期に薄着ですから、もしかしたらと思いまして。つい、お話をしたくなって

しまして」

こう言うと、老人、いや老紳士は朗らかに笑い、自分の隣に座るように促した。

「これはなかなか共有し難い話ですからね。私は長い間患っていますが、あなたは？」

「自分はつい最近気が付きまして。今日、実家に帰るところです」

「そうでしたか。きっと治るきっかけがつかめます、羽を伸ばすつもりで帰ると良いですよ」

「そんなものですか」

「そんなものですよ」

笑う老紳士の姿にどこかにあった緊張が和らぐ。たとえ根拠がない気休めだとしても、前途が明るい物のように感じてくる。

「気が楽になりました。あなたもお帰りになるところですか？」

「ええ。大事な家族に会うために帰ります。待ち人が来たら行くつもりです。・・・そうだ。助言をしておきましょう。感覚に身をゆだねて、夢現になりなさい。そうすれば夏を訪れる事が出来ます」

「夢現・・・。暑さやセミの声でも十分夢を見ているみたいですけど・・・」

「暑かったり、晴れていたりするのは、目や肌だけが夏にいるからです。他の部分はまだ今にいます。ですが、それは気づいていないだけ。夏と今、二つを同時に感じているから、整理されて一方が無かったことにされているだけです」

「なるほど。ちょうど今は夏と今の間にいるというわけだ」

「夏に行くには、夏の感覚を追いかければいいのです。視覚よりも触覚よりも、何よりも先に心が既に夏にいるわけですから。すぐ原因を見つけられますよ」

「いやあ、本当に励みになります。そういえば、夏を訪れると言いますが、夏から帰れなくはないんでしょうかね」

老紳士の話す言葉は、不思議で、普段ならば信じなかったと思う。しかし、柔和な笑みと共に、当然のことのようには話している姿は確信に満ちていて、思わず信じてしまった。

「サマーシンドロームは心の一部だけが夏にいるわけです。逆に言えば、心の一部は今にいるわけです。だから帰ってこられますよ」

「ああ、確かに。本当にお詳しいですね。長く患っているとおっしゃっていましたが、それほど詳しいなら・・・」

「・・・私もそう思います。大事な物を置いてきましたから。ああ、待ち人が来たようです。それでは」

老紳士はスッと立ち上がると待ち人がいるであろう方へ歩いて行った。手元の時計を見る。自分の乗る電車もそろそろだ。顔をあげ、老紳士の後ろ姿を探す。あれほど目立っていたのに、もうどこにも見えなかった。

いざ久しぶりに帰省をすると、いろいろと変わっていて困惑する。あの店はどこに行ったのか、こんな店あったか、家はこんなに古く小さかったか等々。少し歩いただけでこれなの

だから、時間の流れの残酷さを感じずにはいられない。

両親に病気で帰ると言ったときには、驚かれ、実際に帰ったら、根掘り葉掘り聞かれた。そして大したことではないことがわかると、安心して放っておかれた。そういう対応をして欲しかったから、文句はなかった。が、それはそれで釈然としない部分もある。

自分の布団で眠ったが、違和感があった。実家から出るまではずっとこの布団で寝ていたのに。もうこれは自分の布団ではないのだと強く感じた。自分の布団は自分の家にしかない。ここにはない。・・・と、ここまでくれば普通眠れなくなるが、人間、そこまでドラマチックに出来ていないらしく、目を閉じたらもう眠っていた。きっと五分も待っていなかった。さらに夢も見た。木漏れ日。子供の声。セミの声。眩しい太陽。川のせせらぎ。ほこりっぽさ。子供の声。嫌な汗。セミの声。恐怖。張り詰めた糸。いつ切れるか。まだ。まだ。まだ。大きな音が何もかもを叩き割った。飛び起きるでもなく、自分が自分の脇の裏を見ている事に気が付くと、ゆっくりと目を開いた。心臓が大きく鼓動しているように感じ、背中汗でじっとり濡れていた。目をしばらく泳がせ、枕元に置いていたスマホをとり、メモ帳を開く。病院に行ったその日から、夢日記をつけるようにしていた。役に立ちそうにない単語と文章が羅列されている。サマーシンドロームの患者はみんな似たようなことを書くのだろうか。専門家ではない自分には、夢から何を読み取ればいいのか、さっぱりわからなかった。

今日は、真昼に散歩をする事にしていた。故郷に帰れと言われたが、故郷で何をしろとは言われなかった。唯一当てになりそうな助言は、夏の感覚を追いかけろ、だった。正直、昨日は雰囲気呑まれてそういうものかと納得してしまったが、改めて考えると意味不明だ。しかし、これしかない。夏の感覚とやらを追い求めて、真夏の真昼間の炎天下を目的もなく彷徨うという愚行しか選べる道はない。エアコンの真下で寝転んでいても解決するとは思えない。

本日は晴天、小春日和、過ごしやすいお天気です。今朝のお天気アナのセリフを思い出しながら、照りつける太陽を睨みつけ、足の向くままに歩いていく。歩いていて、改めて思ったが、ここはそれほど田舎でもない。中途半端に都市化されていて中途半端に自然が手つかずになっている。よく言えば緑ある町だろうか。悪く言えば住宅街だとか商店街だとかにするほど人がいないから、間を緑が埋めている・・・というのは流石に言いすぎか。けれど、その緑が子供時代のおもちゃの一つだった。自分の何倍もある木に登ってみたり、蹴とばしたりしてみれば、コクワガタの一匹か二匹は見つけられた。時折ハチが一匹ぽつんと出てきて慌てて逃げたりもした。石を投げつけて撃退しようとしたと思う。角から覗いてみた、遊び場の一つだった駐車場にはもう木は無かった。この辺りの子供はここで虫を見つける事は永遠に無い。

どうしようもなく暑いので、川に行くことにした。少しは涼しいだろうし、何かがあるかもしれない。川が無くなるという事はたぶんきっとそうそう無いと思う。手を鞭代わりにして足を叩く。足の動きは鈍く、まるで駄馬の様。何もかも暑いのが悪い。体の動きに合わせて

頭も必要以上に動く。住宅、木、今にも壊れそうな屋敷、厚着をした人、子供の甲高い声、コンビニ、いい加減聞き飽きたセミの鳴き声、全てが通り過ぎていく。ああ、そういえばこの道には見覚えがある。それはちょうどデジャヴのような印象だった。かつてここに来たというよりも、かつてのここに来たという印象だった。より正確に表現しようとすれば、川から全く同じ水を二回汲み上げたような気分だった。少なくとも懐かしいという感情は先にやって来なかった。

道の先、曲がり角を子供が走っていった。その赤い色をした T シャツの背中だけを見た。横切って走っていったのに、背中だけしか見なかった。俺は背中を追って走った。嘘だ、小走りだった。急ぐ気持ちと急ぐ必要は無いという予感がごちゃ混ぜになった結果だった。走って走って走りぬいて、町の端まで来たようなつもりになった。それは子供の頃の話だったか。今の大人の歩幅では、すぐ近くだった。子供の頃はペースも考えずに全力で走っていたから、あんなに遠く感じたのだろう。それでも体力不足な自分は、手を膝において、ぜえはあと息を吐く。息をしっかりと整える前に顔を上げ、背中を追いかけた結果を見る。そこは公園だった。

それなりの大きさの公園だったが、遊具がたくさんあるわけではなかった。ここでよく遊んだ記憶がある。疲れて、端のベンチに座る。そこはちょうど木の影になっていて涼しかった。昔はたくさんの子供がここで遊んでいた。まあ、公園全体をじっくりと観察したことなんてないから、本当かどうかとも分からない。それでも常に十人かそれくらいの子供と遊んでいた覚えがある。息も整ってきて、赤い T シャツの子供はどこに行ったかを見回すが、どこにも見当たらない。見失ってしまったのだろうか？　そもそも、何故あの背中を追いかけたのだろう。訳が分からなくなってしまう、ベンチの背もたれに身を預け、天を仰ぐ。木々の葉から漏れる太陽の光は、まるでステンドグラスのようで美しかった。風に揺られ刻一刻変化する光に目を奪われる。

そういえば、こんな光を以前も見た気がする。カクテルパーティー効果で忘れ去られていたセミの鳴き声が、再び騒ぎ始めた。きゃあきゃあと声がする。顔を戻すと、そこには子供たちが遊んでいた。十人くらいで、その中心に赤い T シャツを着た子供がいた。その顔を窺う事は出来なかった。あり得ないほどに太陽が輝いて、その光が子供たちの顔を隠していた。顔が見えない、顔のない子供たちはかなり不気味だが、ひどく懐かしさを感じさせた。彼らは鬼ごっこをしているようで、黄色い服の子が今から転ぶ。本当に転んだ。仲間がわっと集まって怪我をしてないか確認しに来る。転んだ子はニカッと笑って大丈夫だった事を伝える。いや、伝えたんだった。相変わらず子供の顔は光で見えない。それでも知っていた。あれは俺の遊び友達だ。ただ子供が遊んでいるだけなのに、ひどく心が締め付けられた。眉間にしわが寄り、口の端が下に向く。ただ子供が遊んでいるだけなのに。そういえば、俺はどれだっただろう。夏の日差しの中、毎日のように遊んでいたのをよく覚えている。どれだったろう。あの赤い T シャツの子だったろうか。腕を上げ、一人ひとりに指を指してみる。そして、一人ひとりの名前を言ってみようとする、口からは言葉にならない音が漏れるだ

けだった。年月がいかに残酷なものとはいえ、あんなにも遊んだ仲間の名前がこうも言えないなんて。自分がひどく冷たい奴のように思えた。少し投げやりな気持ちになりつつ、赤い T シャツの子を指さした。

「勇一」

不思議なほどスルリと、滞りなく口から彼の名前が飛び出た。そう、赤い T シャツを着たあの子供は勇一。いつもみんなの中心にいて、話の分かる奴だった。ガムを噛むように、滑らかな家具の表面をなぞるように繰り返し、その名前を口の中で小さくつぶやく。勇一。勇一。勇一。勇一。気のいいやつで細かい所までよく気が付いて、それでいて大胆不敵で……。そんな彼とつるむのは楽しかったし、間違いなく一番の親友だった。そして、勇一を指す指は、ゆっくりと横にずれて白い T シャツを着た子供に向いた。

「俺だ」

その一言を口にした途端、世界が急に鮮やかになった。度の合わない眼鏡を変えたような、ムツとした多湿な部屋から、風が吹き抜ける草原に飛び出たような。世界と自分との間にあった透明な仕切りが取り払われたかのようなだった。今まで俺は息をしていなかったのかもしれない。そう思った。息を大きく吸って、大きく吐き出す。ふと、子供たちの顔が見えるようになっていくことに気が付いた。太陽は相変わらずギラギラと光り輝いていたが、その光はさっきよりも大人しかった。子供たちの顔はどこかで会ったような懐かしい顔ばかりだった。

立ち上がって、子供たちに近づいてみようとする、子供たちはすうっと消えてしまった。まるで陽炎のようだった。また遠くに赤い背中が見えた。あの方向は川だ。そういえば、川でもよく遊んだものだ。照り付ける太陽を背中に感じながら川へと歩いて行った。川べりを見ると、やはり勇一たちがいた。何やら話し合っているようだった。

「なあ、暑いから川で遊んでるけどさ、そろそろ飽きてくるよな」

「でも涼しいとこって他にあるかあ？」

ワイワイとあーでもないこーでもないと取り留めなく話していた。そんな時間が楽しかった。

「良い事思いついた！肝試ししようぜ、肝試し」

勇一がそんなことを言う。いつも提案するのは彼だった。

「でもさあ、いい場所あったっけ」

「オバケ屋敷に行こうぜ！」

俺が言う。苦い後悔と共に記憶が蘇ってきた。ここで言うオバケ屋敷とは遊園地のそれではない。オバケが出てきそうなほどボロボロの屋敷の事だ。子供の間では、吸血鬼の屋敷だとか人食い屋敷だとか好き勝手に噂していた。鍵があっても入る子供が入る隙間なんていくらでもあった。ワイワイとひとしきり好きな事を叫ぶと、子供たちはオバケ屋敷で肝試しをする事で一致していた。

「入るだけじゃさ、肝試しにならないじゃん。テストしなきゃさ」

「あー？ テストったってなにすんの、ユーレイでも捕まえる？」

「そうだ！お札持って帰ってくるってのはどう。お札置いとくからさあ、それ取って帰ってくる」

「良いけどさあ、誰がお札を置くんだよ」

誰がオバケ屋敷にお札を置きに行くのか、それでもめはじめた。みんなでぞろぞろと置きに行ってしまうては意味が無い。だから、誰かが代表になって置きに行く。実に怖くて損な役回りだ。もちろん誰もやりたがらない。お前やれよいやいやお前やれよと、じゃれながら互いに押し付け合う。全く決まらないから、結局、じゃんけんというシンプルで万能な解決法に頼る事になる。最初はグーじゃんけんポン。深い意味もなく大げさに振りかぶってみたり、適当なブラフを口にしてみたりする。

じゃんけんで最後の最後まで残ってしまったのは、勇一だった。正しく言いだしっぺの法則だ。俺は早々に勝ち抜けて、ほっと一息ついていた。砂場での山崩しで上手く相手の番に回せたような気分だった。

「えっ、げっ、俺かよーっ！」

勇一は自分の手を恨めしそうに見て、唸りながらしぶしぶその役割を了承した。気づけば日が傾いて夕日になり、子供たちはバラバラに帰ろうとし始めていた。視線を落として確認した俺の腕時計は13時を指していた。子供たちに混じって、あの頃の俺は帰ろうとしていた。けれど、勇一が肩を掴んで引き留めた。

「何さ」

「康広お、親友だろ、わかるだろ」

「オバケ屋敷だろ。でもじゃんけんで決めたしさあ、ビビってるわけじゃないだろ」

「んなわけねえけど、冷たい事言うなよな。一緒に来てくれよ、お札用意するから、また明日な。な！」

あの時、正直な所、ボンヤリ怖いと思っていた。面倒だし断りたかったが、親友の頼みをすげなく断るのは無理だった。今思えば、オバケ屋敷なんて言わなければ良かった。結局、渋るだけ渋って、一緒に行くことにした。しばらくすると、また二人の姿は消えてしまった。

夢遊病のようにいつの間にか足が動いて、俺はどこかへ向かい始めていた。行き先は分かり切っていたが、それでも”どこか”と表現したかった。認めたくないためにそれを見ようとしない、意図して意識しないで見ようとしない、そんな気分だった。これまでの体験は懐かしさがこみあげてきたが、嫌な気分もせりあがってきている事を意識しなければいけなかった。ジェットコースターの頂上の先には何が待ち構えているかをいい加減思い出さなきゃいけない。俺の足はまっすぐオバケ屋敷に向かっていった。オバケ屋敷。今では倒壊寸前の取り壊しが決定した廃屋で、当時は管理されなくなった荒れた屋敷で、かつては仲睦まじい夫婦が住んでいたらしい。妻は病死したただの殺されたただの適当な事が言われていたが、確か

なのは全く管理をしなくなっても屋敷そのものは手放さなかったらしく、一度も売られていないという事だ。変わった家主が存在していただけで、オバケも吸血鬼も化け物もない、ただの屋敷だった。この事をあの頃の俺が知っていたら、オバケ屋敷に行こうだなんて言わなかっただろうか。足が止まった。俺は荒れた屋敷の前に立っていた。屋敷の庭は手入れされなくなり、雑草が好き勝手に生えていて、屋敷の壁はひどく傷んでいた。蔓が絡みついた門には鎖が巻き付けられ、南京錠で閉められていた。

「確かこの辺りだったっけか・・・」

しゃがんで生け垣の根元を見ると、後から生えた雑草や誰かが置いた枝葉に隠された抜け道があった。ぽっかりと空いていて、小柄な大人でも無理をすれば入り込めそうだった。実際、当時もこの隙間から屋敷に入っていた。

立ち上がり、膝を軽く払う。じっと屋敷を眺める。不愉快な、背中を皮膚の内側からかきむしられるような嫌な気分になる。嫌な記憶が不意に蘇って嫌になってしまうような、そんな感覚だ。失敗を直視することほど、それも自分の弱さが原因の失敗を直視することほど、情けなくて嫌なものはない。公園で勇一の顔を見た時から、なんとなくわかっていた。これが俺の忘れ物だ。

夕方、いつも通りに遊んだ俺たちは、その足でオバケ屋敷に向かった。ボロい壁、伸び放題の雑草、今にも何か出てくるんじゃないかと思った。

「おい、あの窓の所、誰か見てなかったか」

勇一はそんな冗談を言ってきたが、空元気なのはすぐに分かった。俺も勇一も威勢のいい事を口にしていたが、その実、とても怖かった。

「カーテンだよ、付き添い頼んどいてビビんなよな」

あの時は完璧に誤魔化せていると思ったが、勇一もきっと俺が怖がっている事に気付いていたに違いない。大人しく怖いから帰ろうと、互いに言えばいいのに、互いに意地を張って言い出せない。ビビってるかいいやビビってない、そんな問答を何回も繰り返して屋敷にコソコソと入っていた。勇一は用意がいい奴で、懐中電灯を持ってきていた。屋敷の中は、夕日が窓から入ってきているとは思えないほど暗かった。顔を見合わせると、さっさと札を置いて帰る事で考えは一致しているようだった。もう人が住んでないような屋敷だからといって、ズカズカと入るわけにはいかなかった。出来る限り音を立てないようにこっそりと歩を進めた。何か大きな音を立てて、オバケが出てきてしまったらどうしようと思っていたから。話をするときも耳元に口を近づけてからだった。呼吸は浅く、ほこりっぽい空気にむせそうになる。家具は粉砂糖をまぶされたようにほこりがかぶっていて、蜘蛛たちは巣作りに励んでいるようだった。

「・・・なあ、どこに札を置くつもりなんだよ」

「とりあえず二階。一階じゃつまんねーだろ・・・」

勇一が階段を照らして、一步一步静かに上っていく。階段は床よりも大きく軋んだ。ギィ、

ギィ、と鳴る。足音がもう一つ増えたらとか、実は十三階段なんじゃとか、いろんな不安が頭をよぎるが、特に何事もなく上り切った。ここまできると少し余裕が出てきて、おっかなびっくりの今までの恥づかしなくなってくる。もう少し大胆にやろうという気になる。

「・・・なあ。怖かったかよ」

「ニヤニヤすんなよ。ビビるわけじゃないじゃなか」

「手っ取り早くさ、分かれてやらない？」

「いいぜ。俺こっち行くから、お前あっちな。助けて欲しかったらせいぜい叫べよな」

「お前がな」

俺が行く方は比較的明るく、懐中電灯がなくとも何とかかなりそうだった。後ろのから聞こえる床の軋む音が遠ざかると、急に心細くなってきた。水風船がただの風船になってしまったような感じだった。心細くなっただけで、怖いわけじゃないから、元気を出して進んだ。適当に部屋を開けて、よさそうな場所がないか探す。大きな音を出したいとは思わなかったから、静かに探した。どの部屋もほこりっぽく、どの部屋も日付を決めて出て行ったというよりは、住人が急に死んでしまったような状態だった。そう思うほど物が多かった。ただどれもお洒落でほこりまみれなだけで、オバケ屋敷に相応しいおどろおどろしい物はなかった。魔女が使うような髑髏のキャンドル置きなんてものは当然ない。それでも、セミの鳴き声と自分の呼吸と鼓動、床の軋む音しかない世界は、どうも口が渴いてしかたなかった。

不意に人影が見えた気がした。少しだけ開いた扉から、人影がゆらりと一瞬出てきたように見えた。つい、その人影を探そうと部屋に近づいた。正体を知ってどうするのか、むしろ人がいるなら避けるべきなのに、好奇心に従って調べる事にした。薄く開いた扉の隙間から中を覗くと、夕日の中でカーテンがひらりひらりと舞っていた。本だとか荷物が無造作に積まれて、身を隠す場所はたくさんあった。さらに別の部屋への扉さえあった。ドアノブに手をかけ、ゆっくりと押す。通れるくらいの隙間を作って、猫のように滑り込んだ。ぐると見渡しても、人らしい姿は見えなかった。気のせいだったか。そう思った時、床が腐りかけてでもいたのか、とびきり大きなギィッという音が出た。不意を突かれたものだから、思わず背筋を伸ばして固まってしまう。少ししてすくめた首をゆっくりと戻すと、肩に何かがとんと乗った。肩を叩かれた？いや、撫でられているような。「うわっわっ！」気持ち悪くて、肩の辺りを手で払う。手に何か当たった感触がした。全身で振り払うようにしたものだから、積んであった本にぶつかって姿勢を崩して倒れてしまった。ドサドサドサッと大きな音が響く。ほこりが砂のように舞い上がり、せき込んでしまう。目をつぶっていると、上から何か薄い物が覆いかぶさってきた。取り去ろうと暴れるけれど、手に巻き付いてくるし、ますますほこりが舞い上がってせき込みが酷くなる。肺の中の空気も吐き出し切って、次は胃の中身も吐き出そうかという具合になった頃によく被さってきた物を払いのけられた。部屋を飛び出して乱暴にボタンと扉を閉める。

そして、ゆっくりと深呼吸した。やっぱりほこりっぽかったが、さっきよりはマシだった。頬に触るとほこりと汗が混ざってべったりとしていた。とても嫌な気分だった。札を置く事

なんてどうでもよくなってきて、そもそもこの屋敷に歓迎されていないような気がしてきた。まあ、歓迎するわけがないのだけれど。人食い屋敷という言葉も浮かんできて、すっかり怖くなってしまった。セミの鳴き声は俺を嘲笑っているようで、床の軋む音はまるで屋敷の舌なめずりのようで。もういい。帰ろう。出来るだけの速足で、それでいて音を鳴らさないようにして、勇一が向かった方に歩いて行った。

「うっ」

ちょうど分かれた所で足が止まった。勇一がいる方はかなり暗く、目を凝らさないと先がよく見えなかった。勇一はどこかの部屋の中にでもいるらしく、明かりは見えない。大きな声を出して来てもらおうか。いや、大きな声を出してしまったらどうなるか分からない。さらに負けを認めたようで恥ずかしい。じゃあ、勇一を探しに行こうか。いや、こんなに暗いんじゃあ足元も覚束ない。この暗がりにはちょうど大きくあけられた口のようにも見えて、怖い。呼ぶか探すか。俺は二つの選択肢の間で迷い始めた。答えは分かり切っていた。呼べば良かった。でも。でも。でも。そんなくだらない言葉が繰り返されて、延々と迷い続けていた。答えが分かっているのに悩み続ける。矛盾した二重の思考がそこにはあった。

でも。でも。でも。繰り返し続けて繰り返し続けて、雷が落ちたようなバリバリッという巨大な音が全ての思考を断ち切った。勇一の言葉にならない叫びが次いでやってきた。俺の耳は聞き逃さなかった。緊張と迷いと羞恥と恐怖で満たされた風船が割れた。俺は叫びながら逃げた。・・・逃げた。何も考えず逃げたと振り返れば救いがあるが、明らかに俺は勇一よりも自分の恐怖心の方を優先した。振り返ろうか戻ろうかと迷うふりをしながら、逃げ出した。もう選択しているのに選択していないように考えていた。なお悪いのは、屋敷の前で待つならまだ救いがあるのに、そのまま走り抜けてしまった事。尚更悪いのは、すぐにこの事を白状しなかった事。もし、死んでしまっていたら、見つからなかったら、つまるところ、屋敷に食べられてしまっていたらどうしよう。そんな恐ろしい妄想があった。という建前が、怒られたくないという保身の本性を隠していた。けれど、卑怯な沈黙は長続きしない物だった。勇一が帰ってきていない事はあつという間にバレた。連絡網でそれらは伝わり、誰かが肝試しの事を白状した。もちろん、勇一と俺が忍び込む事も。当然、事情を聴かれるわけで。暖簾に腕押し糠に釘、そんな調子でしばらく口をもにやもにやとさせていたが、詰められて白状した。怒鳴られ泣かれ拳骨をもらう事になった。

結局のところ、勇一は食べられてなんかいなかった。腐った床を踏み抜いて、床に腰のあたりまではまってしまっていた。幸い、膝を浅く切るだけで済んでいた。それでも、ひどく怖かったに違いない。声を出しても助けは来ず、出る当てはなく、足から血が流れ出ている。腰から下がどうなっているか確認する術もない。あの暗がりに対して俺が感じていた恐怖なんて、それと比べれば無いも同じだ。この一件の後、勇一と俺との関係はどうしてもギクシャクしたものになった。気は合うし、話も合う。親友に間違いないのだけれど、ふとした瞬間に一步距離を取ってしまう。見捨てられたのだから、当たり前ではある。時が経って、新しい遊び仲間のグループが出来ると会う回数は減り、もう会わなくなった。

友達を見捨てた。それも自分の卑怯さが原因で。これが俺の後悔だった。苦々しさが口に広がって、自分で自分を傷つけたくなる。人によってはそんな事で、サマーシンドロームになるなんて！と思うかもしれないが、俺にとってはそうではない。普通なら合理化したり正当化したり、ちゃんと整理をつけるものだ。けれど、整理をつけないまま、そのままずっと見て見ぬふりをし続けていた。何かをしてこの事に決着をつけないといけないのに、そうしなかった。答えは分かり切っているのに悩んでいるふりをしていた。いや、それどころか、悩みながら悩むことを忘れていた。意識から遠ざけて無意識に押し込んでいた。その結果が今だ。

屋敷の一室のカーテンが外れて落ちた。それを見て、何をすべきかを直感した。いや、既に知っていたのかもしれない。しばらくすると、子供が叫びながら屋敷から飛び出してきた。雑草の生えた庭をかき分け、生け垣に身をねじ込んで飛び出してきた。弾丸のように飛び出たそれを、全身で止めた。腹に顔をぶち当てた子供、俺だ、の両肩をしっかりと掴んだ。

「わぁッ何すんだよ！」

「逃げんのか」

「は？何だよ放せよオッサン！」

「友達見捨てて逃げんのかって聞いてんだよ」

「・・・・・・・・」

「答えはもう分かってるだろ」

「・・・放せよオッサン」

掴んだ肩を放してやる。しばらく互いに黙っていると、子供の頃の俺は、俺に背を向けて、生け垣に身を潜りこませた。俺は顔を上げ、屋敷を見る。やっぱり嫌な気分になる。けれど、今は少し違うように見える。言いたい事が言えた、あの時必要だった言葉を伝えられた。こうなれば良いとずっと思っていた。この行為に全く意味がなかったとしても、言えてよかった。もうここにいる必要は無い。踵を返して、家に帰った。

「はくしょい！」

翌朝、身を震わせ、くしゃみをした。寒かった。外の太陽は雲の向こうで輝いていた。

夏は終わった。

[illegible]

る	今	回	の	面	接	は	、	移	動	に	凄	ま	じ	い	時	間	が	か	か
っ	て	い	る	。	そ	の	せ	い	で	既	に	疲	れ	き	っ	て	い	る	の
だ	か	ら	、	愚	痴	の	一	つ	や	二	つ	出	る	の	も	仕	方	な	い
事	な	の	だ	。															
聡	明	な	読	者	様	は	こ	こ	で										
『	ち	ゃ	ん	と	面	接	内	容	確	認	し	て	か	ら	申	し	込	め	や
と	思	う	か	も	し	れ	ま	せ	ん	が	、	優	も	確	認	は	し	て	い
る	の	だ	。																
し	か	し	、	そ	こ	で	面	接	会	場	と	勤	務	場	所				
を	一	緒	だ	と	思	い	込	ん	で	し	ま	う	の	が	優	で	あ	り	、
面	接	の	二	日	前	に	気	づ	い	て	、	焦	っ	て	し	ま	う		
子	な	の	だ	。															
	「	住	所	を	見	る	に	こ	こ	ら	辺	だ	と	思	う	ん	だ	け	ど
優	は	軽	く	身	だ	し	な	み	を	整	え	、	建	物	に	入	っ	て	行
く	。	面	接	前	の	待	機	場	所	に	辿	り	着	い	た	優	は	、	あ

た	り	を	見	渡	し	、	自	分	以	外	に	何	人	い	る	か	の	確	認	
を	行	っ	た	。																
		(	ひ	い	、	ふ	う	、	み	い	…	…	っ	と	、	俺	を	含	め	て
		男	六	人	、	女	四	人	で	十	人	か	。	ん	ー	、	可	愛	い	
		子	は	何	人	か	居	る	ん	だ	け	ど	、	俺	の	タ	イ	プ	は	
		い	ね	え	な	。	ま	あ	、	連	絡	先	の	交	換	く	ら	い	出	
		来	た	ら	い	い	な	あ	)											
優	の	考	え	は	打	算	的	だ	が	、	読	者	の	皆	様	も				
『	タ	イ	プ	の	子	で	は	無	い	け	ど	、	可	愛	い	か	ら	繋	が	
		り	だ	け	は	持	っ	て	お	き	た	い	な	あ	』	と	か			
『	可	愛	い	子	の	友	達	に	は	可	愛	い	子	が	い	る	は	ず	だ	
		か	ら	、	そ	の	子	目	当	て	で	』	と	か	考	え	た	事	は	あ
		る	は	ず	だ	。														
心	の	中	で	考	え	る	こ	と	は	自	由	な	の	だ	か	ら	、	優	も	
ま	だ	セ	ー	フ	で	あ	る	。												
優	の	到	着	か	ら	五	分	後	、	新	し	く	訪	れ	る	人	は	お	ら	
ず	、	面	接	開	始	時	刻	と	な	っ	た	。								

																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																								</
--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	----

		や	、	帰	る	の	遅	く	な	り	そ	う	だ	な	あ	…	…	。	ま	
		あ	、	親	に	連	絡	入	れ	と	く	か	)							
優	は	基	本	的	に	へ	タ	レ	で	真	面	目	な	性	格	な	の	で	、	
親	へ	の	連	絡	は	割	か	し	す	る	方	で	あ	り	、	初	対	面	の	
人	、	特	に	女	子	に	対	し	て	委	縮	し	て	し	ま	う	の	だ	。	
		(	し	か	し	、	待	っ	て	る	間	ず	っ	と	面	接	の	練	習	を
			し	て	る	の	も	だ	る	い	し	な	あ	。	こ	の	前	買	っ	た
			漫	画	の	続	き	で	も	読	む	か	)							
そ	う	考	え	っ	つ	、	室	内	に	設	置	さ	れ	た	ウ	ォ	ー	タ	ー	
サ	ー	バ	ー	の	水	を	取	る	優	。	ち	な	み	に	優	は	電	子	書	
籍	派	で	あ	り	、	ア	ニ	メ	や	漫	画	、	ラ	ノ	ベ	も	大	好	き	
な	青	年	な	の	だ	。														

	四	時	間	程	経	っ	た	後	、	九	番	の	番	号	の	男	が	呼	ば	れ
	面	接	室	に	入	っ	て	行	っ	た	。									
		(	や	っ	と	、	次	は	俺	の	番	か	。	先	に	入	っ	て	行	っ
		た	奴	ら	全	員	、	こ	の	部	屋	に	戻	っ	て	来	ね	え	か	
		ら	い	っ	終	わ	っ	て	ん	の	か	わ	か	ん	ね	え	ん	だ	よ	
		な	)																	
	優	は	自	分	の	番	号	が	呼	ば	れ	る	の	を	待	ち	っ	っ	、	ト
	イ	レ	に	行	く	か	ど	う	か	悩	ん	で	い	た	。					
		(	く	そ	～	、	水	飲	み	す	ぎ	た	な	。	ト	イ	レ	に	行	き
		て	え	け	ど	、	番	号	い	っ	呼	ば	れ	る	か	わ	か	ん	ね	
		え	し	…	…	)														
	悶	々	と	待	機	し	て	い	る	間	に	時	は	過	ぎ	、	と	う	と	う
	優	の	番	号	が	呼	ば	れ	た	。										
		「	で	は	、	十	番	の	方	ど	う	ぞ	」							
		「	あ	っ	、	は	い	！	」											

優	は	誘	導	の	人	に	案	内	さ	れ	、	面	接	室	の	方	へ	と	向
か	っ	た	。																
コ	ン	コ	ン																
「	失	礼	し	ま	す	。	十	番	の	方	、	連	れ	て	参	り	ま	し	
た	」																		
「	ご	苦	労	。	あ	と	は	待	機	場	所	の	掃	除	を	頼	む	」	
「	は	い	、	わ	か	り	ま	し	た	。	で	は	、	失	礼	し	ま	す	」
事	務	的	な	会	話	を	す	る	案	内	し	て	く	れ	た	お	姉	さ	ん
と	面	接	官	で	あ	ろ	う	男	の	人	。								
「	で	は	、	佐	藤	さ	ん	。	こ	れ	か	ら	面	接	を	初	め	ま	
す	が	。	そ	の	前	に	、	そ	ち	ら	に	ご	着	席	く	だ	さ		
い	」																		
「	あ	っ	、	は	い	。	失	礼	し	ま	す	！	」						
「	で	は	、	面	接	を	始	め	ま	す	が	、	内	容	は	い	た	っ	
て	単	純	で	す	。	こ	ち	ら	の	問	う	質	問	に	答	え	て		
く	れ	る	だ	け	で	構	い	ま	せ	ん	」								
「	は	い	、	わ	か	り	ま	し	た	」									
「	で	は	ま	ず	一	問	目	…	…	…	…	、	」						

[illegible]

		何	を	欲	し	て	、	何	が	知	り	た	い	で	す	か	？	」		
		「	自	分	は	、	本	が	好	き	で	、	憧	れ	て	る	こ	と	が	し
		た	く	て	、	女	の	子	か	ら	キ	ャ	ー	キ	ャ	ー	言	わ	れ	
		た	く	て	、	も	っ	と	ハ	ラ	ハ	ラ	し	た	人	生	を	知	り	
		た	い	で	す	！	」													
聞	か	れ	た	事	に	対	し	て	、	自	分	の	考	え	を	ド	直	球	に	
投	げ	返	し	た	の	で	あ	る	。											
		「	ふ	っ	、	わ	か	り	ま	し	た	。	以	上	で	面	接	を	終	了
		し	ま	す	。	お	疲	れ	さ	ま	で	し	た	。	面	接	を	終	え	
		た	皆	様	に	、	当	社	製	作	の	食	べ	物	と	飲	料	水	を	
		お	渡	し	し	て	ま	す	の	で	、	ど	う	ぞ	」					
一	瞬	、	笑	わ	れ	た	事	に	気	づ	い	た	優	は	疲	れ	か	ら	、	
カ	ッ	と	な	っ	て	拳	を	振	り	上	げ	、	ス	ト	レ	ー	ト	を	お	
み	ま	い	し	よ	う	と	…	…	す	る	事	も	な	く	、	実	際	笑	わ	
れ	た	こ	と	に	対	し	て	気	づ	い	て	い	な	い	様	子	だ	。		
		「	あ	り	が	と	う	ご	ざ	い	ま	す	。	あ	の	～	、	結	果	の
		方	は	い	つ	発	表	で	す	か	ね	？	」							

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

[illegible]

[illegible]

シナリオ:やさしい怪獣

銭湯員

シナリオ名:やさしい怪獣

タイプ :協力型

サイクル :3

人数 :3 人

シーン表 :通常シーン表

GM 情報

「通常通りでは黒幕を倒せない」をシナリオコンセプトとして作っています。

真の黒幕である田黒 真宏と戦うには、少年からキーホルダーを回収する必要があります。フェア性を意識するなら、GM は少年の秘密が暴かれた時や、田黒の真の秘密が暴かれた際にそれとなくキーホルダーを回収することを促しても良いでしょう。

しかし、キーホルダーを回収してしまうと少年の親友である妖魔は消えてしまいます。そのジレンマを描写して PC 達に回収を躊躇わせるのもいいかもしれません。

クライマックスフェイズでは、キーホルダーが回収されていない場合、少年と妄獣、田黒、PC 達で戦闘が始まります。

少年はエキストラですのでプロット 0 に、田黒はプロット 2 にしてください。妄獣はランダム、指定プロットどちらでも構いません。

行動として、田黒は少年に魔琴を打ちます。かばう等で少年に当たらなかった場合を除き少年を死亡させた後に、自主的戦闘脱落を行ってください。この時点で PC 達の使命は達成されます。

少年の死亡後、妄獣のステータスを妄獣から悪魔に変えて PC 達と戦闘を行ってください。

キーホルダーが回収されていた場合は、田黒と PC 達との戦闘になります。

演出

導入

PC 達は今回の依頼人「田黒 真宏」に招集され、とある会議室に集まった。しかし...

「君たちは僕なんかより優秀だろうから頼んだよ。使役者を見つければ終わるだろうし。」

そう言って今回の依頼人であり、討伐作戦の指揮をする田黒は帰ってしまった。

PC 達は田黒の去った会議室で自己紹介と使命の公開をお願いします。

調べられるハンドアウトには「PC 達」「妖魔」「使役者」があります

クライマックスフェイズ

キーホルダーを回収していない場合

少年と PC 達、妄獣が集まっている所へ田黒が現れます。

「さて、使役者も見つかったしさっさと忍務を終わらせようか」そう田黒は言って戦闘を開始します。

キーホルダーを回収していた場合

キーホルダーを回収した PC 達の元へ田黒が現れます。

「忍務ご苦労。これでもう妖魔が現れる事も復活する事も無いだろう。けどね。私の研究は中途半端になってしまった。君たちには少々付き合って貰おうか。」
そう言って田黒は戦闘を仕掛けて来ます。

ハンドアウト

PC 達の使命は共通です

PC の使命

あなたは泉戸町で発見の報告があった妖魔の討伐を、仲間と共に行う事になった。

あなたの【使命】は「妖魔を倒すこと」である

PC1 の秘密

今回の妖魔は討伐してもまた復活していただきたい。調べてみると、復活をさせる使役者が居るようだ。

あなた達の【本当の使命】は「使役者を殺すこと」である。

また、あなたは今回の討伐作戦を指揮している「田黒真宏」を怪しいと思っている。妖魔の発見・招集を行い、作戦指揮を執っているが、自ら動こうとしない。あなたはハンドアウト「田黒真宏」を調べることが出来る。

PC2 の秘密

今回の妖魔は討伐してもまた復活していただきたい。調べてみると、復活をさせる使役者が居るようだ。

あなた達の【本当の使命】は「使役者を殺すこと」である。

またあなた方は今回の招集で妖魔と戦うと聞き、とっておきのモノを持ってきた。これなら妖魔を楽に倒せるだろう。

あなたはプライズ「破魔刀 志環守」を持っている。

プライズ 破魔刀 士破守(しわす)

このプライズの所持者は常時、妖魔に対する命中判定に+1、その攻撃の回避判定に-1、ダメージに+1 の修正を得る。

PC3 の秘密

今回の妖魔は討伐してもまた復活していただきたい。調べてみると、復活をさせる使役者が居るようだ。

あなた達の【本当の使命】は「使役者を殺すこと」である。

あなたは招集された場所に向かう前に討伐対象の妖魔とある少年と一緒に居るのを目撃している。その様子は襲われている等といった感じでは無く、少年が妖魔と遊んでいる様だった。

もしかしたら遊んでいた少年は使役者であり、悪意を持って妖魔を使役している訳ではないかもしれない。

あなたはハンドアウト「少年」を調べることが出来る。

田黒真宏の概要

今回あなた達を集めた人物。

討伐作戦の指揮を取る。

PC 達が去った後、会議室に戻りゲーム等をしている。

田黒真宏の秘密

今回の依頼人として田黒真宏が使命や秘密を決めている。

彼にやる気はほぼ無い。今回集まったシノビ達は腕利きであり、討伐対象の妖魔は再生能力以外に特筆すべき点の少ない中級妖魔なので、過剰戦力だとも思っている。

少年の秘密と田黒の秘密が全体公開されている場合、【「田黒真宏」の真の秘密】への情報判定が可能になる。

田黒真宏の真の秘密

そう、私こそが今回の事件の黒幕だ。

道端に少年達が興味を持ちそうなキーホルダーの形をした妖魔生成器を置き、幼い子供達の残酷な無邪気さを型に造られた妖魔とシノビを戦わせ、シノビが忍務を経て強くなる原理を解明することが私の目的である。

しかし、シノビと戦わせる筈の妖魔は複数の子供から残酷な無邪気さを得ること無く、一人の少年の優しさのみで造られてしまった。非常に残念だ。

この秘密を知った PC はクライマックス直前に秘密が更新される

更新された秘密(キーホルダー未回収)

あなたは今回の事件の黒幕を知った。妖魔に危険性は無く、代わりに悪意を持って騒動を起こした人物が居た。

あなたの【本来の使命】は、

「少年、小寺優人を殺すこと」だ。

更新された秘密(キーホルダー回収済)

あなたは今回の事件の黒幕を知った。妖魔に危険性は無く、代わりに悪意を持って騒動を起こした人物が居た。

あなたの【本来の使命】は、

「全ての黒幕、田黒真宏を倒すことだ」

使役者の概要

妖魔を復活させている存在。何処に居るのだろうか。

使役者の秘密

妖魔の使役者について調べていくと一人の少年に行き着いた。なんと、妖魔と遊んでいる所が目撃されたのだ。

この秘密を知った人物はハンドアウト「少年」へ情報判定が可能になる

少年の概要

妖魔と一緒にいた所を目撃された少年。遊んでいた様に見えたが・・・？

少年の秘密

少年の名前は小寺 優人、10 歳。泉戸出町に住み、普通の小学校に通う 4 年生だ。彼はある日、学校帰りにキーホルダーを拾った。そのキーホルダーを拾った日から、彼には「ジョッカー」という友達が出来た。毎日、彼が願う「ジョッカーと遊びたい」という願いによって妖魔は復活していたのだ。

プライズ キーホルダー

お土産の定番、金色で龍の巻き付いた剣の形をしたキーホルダー。

このキーホルダーは妖魔・詩神の一部から作られており、所有者の願望を妖魔によって具現化する力があつた。幸い、心優しい少年に拾われ、「ごっこ遊びの友達が欲しい」という願いが叶えられたので被害は無かつた。

妖魔の概要

泉

妖魔の秘密

町で目撃されている妖魔は「妄獣」である。本来は、人の暗い欲望や破滅的な妄想が具現化した妖魔であり、生み出した者に対処しないとまた出撃する危険な妖魔だ。

しかし、調べていくうちに、目撃者が驚き逃げる事はあつても、それに襲いかかり被害を出したという情報が出てこなかつた。危険性は少ないのでは無いだろうか。

NPC のステータス

田黒 真宏のステータス

ステータスは比良坂機関の上忍頭で p200 の偽神参照

忍法の逢魔時は外し、夜雀は真蛇 p119 で習得すること。

奥義数は推奨 2 つですが、参加者に上忍以上が複数人いる場合は増やしましょう

妖魔のステータス

p196 の妄獣と p199 の悪魔を参照

メインフェイズ等では妄獣として扱うが、戦闘時には悪魔としてのステータスを明らかにする。

生命点は据え置きでもいいが、奥義数は 2 つに抑えた方がいいだろう

忍術バトル RPG シノビガミ 理想の学園生活

レグラス

シナリオ名 理想の学園生活
タイプ 特殊
人数 3～5
サイクル 2～3

導入

それはある日の放課後の事でした。

「付き合ってください！」

体育館裏での告白。勇気を出しての言葉だったのですが、

「ごめんなさい」

そう短く断りの言葉を言って告白された方の女子生徒は去ってしまう。

後に残った男子生徒は落ち込み、俯きながら、前も見ずにトボトボと帰ろうとします。しかし、前を見ていないせいで体育館裏の隅にあった石碑にぶつかって倒してしまいました。慌てて直しますが何故か立ちません。男子生徒は周囲を見回して誰も目撃者が居ないのを確認すると、大慌てで帰ってしまいましたとさ。

それから数週間後の事でした。シノビ達に招集が掛かります。

舞台は空真陽学園(そらもようがくえん)。某県にある中高一貫校です。

クライマックスフェイズ

誰も霞の秘密を知らなかった場合、クライマックスフェイズは発生しない

霞の秘密を知っているキャラと知らないキャラが居た場合、それぞれで争い、知っている側が勝った場合のみ奇泡と戦闘になる

全員が霞の秘密を知っている場合、奇泡複数体と戦闘

PC の使命と秘密(全員共通)

【使命】

あなた達は空真陽学園に転校生だ。(以下、キャラの自己紹介文を表の使命とします。)

【秘密】

あなた達は実は忍者である。この学園に何らかの異常があると観測されたが、調査に向かった忍者が成果を上げられなかった為に応援として来た。

あなたの【使命】は「情報を集める」ことだ。

クライマックスフェイズで秘密が更新されます

更新される秘密の分岐

誰も霞の秘密を知らなかった場合

貴方達は色々秘密を調べたが怪しげな人物も事件も無かった。何も無かったと報告して帰ろう。

霞の秘密を知った場合

今回の異常は砂塵霞に化けた妖魔『奇泡』の仕業だったのだ。異常を正す為に奇泡を倒さねば。貴方の【本当の使命】は『妖魔を倒す』ことだ。

他 PC が霞の秘密を知っており、自身が知らなかった場合

いきなり味方の忍者が一般人を襲い始めた。忍者対一般人では惨劇は免れない。止めなければ。

貴方の【本当の使命】は『一般人に襲いかかる忍者を倒す』ことだ。

霧雨 煙霧

【使命】

俺の名前は霧雨 煙霧(きりさめ えんむ)、空真陽学園に通う高校1年生だ。生徒会庶務と陸上部部長を兼任してるから困った事があれば色々手伝える筈だ。よろしくな。

【秘密】

実は俺、霞と付き合ってるんだ。3ヶ月位前に意を決して告白したら頷いて貰ったんだよ。生徒会も雨雪先輩のお陰で楽しいし、陸上部も雷霧っていう後輩が慕ってくれてんだぜ。今俺は理想の学園生活を送ってるよ。

【変化後の秘密】

なんだこれ！霰さんに振られたと思ったら次の日には恋人みたいに接して来た。
変だと思って一度拒絶したらスライムみたいになって襲ってくる！もう訳が判ら
ねえよ……………

よし、これでご主人様の理想が分かるな。ふむ、ハーレム、このギャルゲーとい
うものが理想なのだな。やってみよう。

砂塵 霰

【使命】

私の名前は空真陽学園高校1年の砂塵 霰(すなじり あられ)。趣味は料理と読
書。学園に転校生が3人も来て、何か起こるかもって期待しちゃってるわ。実
は、煙霧君とお付き合いしてます。

【秘密】

貴方はこの学園に巣食う妖魔『奇泡』だ。貴方は自身の封印を解いた『ご主人
様』の理想を実現しようとして、学園の生徒達を次々と捕食し成り代わってい
た。

この秘密を知ったPCはクライマックス前に配られる秘密が「妖魔を倒す」にな
る。

この秘密は受け渡し不可で感情共有も発生しない。

また、この秘密を手に入れたPCは一部のキャラの秘密が変化する。

好きだという女になって接してみたが拒絶されてしまった。この女の知識とご主
人様の理想が異なる可能性があるな。確認しなければ。

ステータスは奇泡(基本ルルブ p198)に特技として遁走術、忍法に友吊(基本ルルブ
p95)・無面目(基本ルルブ p101)を持たせたもの

雨雪 曇

【使命】

私は空真陽学園高校2年生、雨雪 曇(あめゆき くもり)と言います。これでも
生徒会長をしているんですよ。転校生という事で何か困ったら私を頼って下さ
い。できる限り力になりますから。

【秘密】

私は霧雨煙霧君、えー君が好きなんです。しかし、えー君には砂塵霰という恋人が既にいらっしゃり、とても仲睦まじく過ごしています。その光景は正直に言って、羨ましくもありそこに居るのが自分なら、とも思ってしまう。アプローチも遠慮がちにしか出来ませんし、後輩にも煙霧を好きな娘が居るらしいので、不安は募るばかりです。

【変化後の秘密】

私の名前は雨雪曇になった。前は我儘な子供みたいで嫌いだったご主人様が大好きな、雨雪だ。参考資料的に呼び方も変えた方がいいかな。よし、思い切ってえー君って呼んでみよう。

霏晴 雷霧

【使命】

私は霏晴 雷霧(みぞれはれ らいむ)。空真陽学園に通う中学一年生なんだ。これでも陸上部のエースって言われるほど脚には自信があるよ。

【秘密】

実は同じ部活の煙霧先輩が好きなんだけど、霰先輩っていう美人の彼女さんがいるらしい。けど、私は諦めないよ！

【変化後の秘密】

よし、ご主人様も喜んでくれるかな？ご主人様の持っていた知識的には後輩キャラって言うのが当てはまりそう。なら、呼び方も変えた方がいいよね。煙霧先輩って呼ぼう！

積乱 入道

【使命】

私は積乱入道(つみだれ いりみち)。非常勤講師としてだが学園に務めている。霧雨という生徒を中心としてギャルゲーみたいな雰囲気があって嫌になる。サッサと別のところに行きたい。

【秘密】

実は私は忍者だ。所属先から異常があると言われて来てみたが、特に変わった所は無く、そのせいで忍務も終わらない。もううんざりし始めている。応援が来るとは言うけど、どうせ、少し調べたら戻るお気楽な奴らだろう。頼むから面倒事は起こさないでもらいたい。

この NPC は秘密の受け渡しが無い場合はすべての秘密を持っていないものとして扱う

ステータスは基本ルルブ p188 の剣仙



作：夢野美々